

# 時をかける少女

2006(平成18)年8月19日鑑賞(テアトル梅田)

☆☆☆



## 第7章

苦手だけど意外な拾い物もある

監督＝細田守／原作＝筒井康隆『時をかける少女』（角川文庫刊）／声の出演＝仲里依紗／板倉光隆／石田卓也／原沙知絵／谷村美月／垣内彩未／関戸優希／松田洋治（角川ヘラルド映画配給／2006年日本映画／98分）

……ひょっとしてタイムスリップもののはしりとなったのが、筒井康隆原作の『時をかける少女』……？ 主人公も芳山和子から女子高生紺野真琴に代替わりしたらしいが、「タイムリープ」を媒介として描かれる男2人女1人の友情物語(?)は、思春期特有の瑞々しさでいっぱい……。そりゃ同じアニメでも、訳のわからない抽象論を振り回す『ゲド戦記』(?)より、このフレッシュな物語の方が面白いのは当然。もっとも、高校生たちのあの荒っぽい乱れた言葉遣いには、ただ啞然……？

## 原作は……？ 大林宣彦版は……？

大林宣彦監督の『時をかける少女』（83年）は原田知世のデビュー作だが、これが大ヒット。そしてその原作は、1965年に発表され、原作者の筒井康隆が「自分にとってはよく稼いでくれるお嬢さんみたいなもの」と言うように、累計200万部を超えるロング・アンド・ベストセラーとなっている同名小説。したがって、この原作はテレビでも再三映像化されており、大林版は映画版の代表の1つ。

今回の細田守監督版は1997年の角川春樹監督版に続く映画化第3作目だが、その特徴はアニメで撮ったこと。ひょっとしてアニメにした方が、タイムスリップ（タイムリープ）を描きやすくなる面があるのかもしれないが、私は基本的にアニメが嫌い。そのため実はこの映画の鑑賞は予定に入れてなかったのだが、ある事情によって結局行くことに……。

## 続けて観た面白い「タイムスリップ」もの……

タイムスリップもので面白かったのが、本広克行監督の『サマータイムマシン・ブルース』（05年）だったが、近時ハリウッドで大ヒットしているのが『もしも昨日が選べたら』（06年）で、私はこれを8月15日に観た。これは「万能リモコン」をワンタッチで操作することによって、人生を自由に巻き戻しや早送り、そして静止ができるというアイデアだったが、『時をかける少女』は、タイムリープするためには、大きくジャンプしなければならないからちょっと大変……？

また、『もしも昨日が選べたら』には「操作記憶機能」がついているのがミソで、これによって主人公はエライ目に遭うことになるが、『時をかける少女』は、「タイムリープ」をつかうことができる回数が決まっていたことがミソ……？

いくらでも無制限にこれらの機能を使って遊ぶだけでは面白いストーリーが生まれないのは当然で、そこに何らかの特約があるからこそ悩みが生まれ、そこに決断が生まれるため、人の心を打つストーリーになるわけだ。

『もしも昨日が選べたら』では、あっと驚くドンデン返しが用意されていたが、『時をかける少女』ではどうだろうか？ あった、あった、こちらにも……。さて、それは……？

## 新規キャラが主人公に……

私は原作も読んでいないし、大林版も観ていないので、ホントは『時をかける少女』を評論をする資格はないのだが、今回はじめて観たことによる自分の勉強の整理と現時点での坂和評論の視点を少しだけ……。

今回の細田版アニメの最大の特徴は、原作でも大林版でも主人公となる『時をかける少女』は芳山和子であったのに対し、今回は女子高生の紺野真琴（仲里依紗）というキャラを新規に設定し、真琴を主人公に据えたこと。もっとも、芳山和子（原沙知絵）は真琴の叔母さん役として登場し、真琴に対してタイムリープの可能性を教えたり、タイムリープを続ける中で深まっていく真琴の悩み相談にのるなど大きな役割を果たしているが、やはり一歩も二歩も退いたサブ的役割に徹している。

しかし、こんな新規キャラを主役としたため、メインストーリーも多感な女子高生の恋愛と友情、そして人生の進路をテーマとしたものに……。

## 男2人と女1人の友情は……？

真琴は野球大好き女子高生。ちなみに真琴が通う東京の某高校がどこにあるのかストーリー上は明らかにされていないが、仮に西東京であれば、真琴は昨日の第88回全国高校野球選手権大会における駒大苫小牧高校 VS 早稲田実業の決勝戦に、早実の応援で甲子園まで出かけていたこと確実……。

そしてそれは、真琴の2人の男友達である津田功介（板倉光隆）と間宮千昭（石田卓也）もきっと同じ……？

それはともかく、この2人は真琴のクラスメートで席もすぐ近く。功介は医学部志望の秀才だが、なぜか放課後の遊びの野球につき合っているから、それはなぜなのかがちょっとした注目の的に……。また千昭は数学は得意だが漢字はダメ。そして考えるより先に手が出てしまうというタイプだが、どうも転校生のよう……？ 2人ともモテモテのイケメンだから、女の子から告られる（告白される）こともあるが、なぜか真琴と遊んでばかり……？ しかし、高校時代におけるこんな男2人と女1人の友情なんてやはり仮のもの……？ そこには、青春時代特有のさまざまな悩みが……。

## 『ゲド戦記』 VS 『時をかける少女』

今夏は宮崎吾朗監督の『ゲド戦記』（06年）が大きな話題を呼んだ。今夏の日本アニメの話題作は『ゲド戦記』と『ブレイブ ストーリー』（06年）、そして『時をかける少女』の3つ。『ゲド戦記』は私の評価も低く一般の評価もイマイチながら、興行収入は好調で、東宝は興行収入100億円突破という強硬の姿勢とのこと（2006年8月17日付産経新聞夕刊）。他方、『ブレイブ ストーリー』は「話題を集めて期待されたわりには“まずまず”のスタートに留まった。最終見込み20億円と予想されている」とのこと（『キネマ旬報』8月下旬号）。

これに対して、『時をかける少女』は単館での上映だったにもかかわらず、その出来の良さで人気を呼び、その興行収入は好調、そしてネット上の評価では絶

賛に近いと新聞で報じられている（上記産経新聞）。私が『時をかける少女』を観なければ、と思ったのは、アニメ3作品をめぐるこんな評判を耳にし新聞等で読んだため。さて、私の目で観た『時をかける少女』の出来は……？

## タイムリープとは？

リープとは leap で、跳躍という意味。パンフレットによれば、タイムリープとは「時間と場所を一気に跳躍して、現在とは別の時間、場所に行く超能力」のことと解説されている。したがって、これはいわゆる「タイムスリップ」と同じ意味……。

映画ごとに異なるのは、どうやってタイムリープするのだが、この『時をかける少女』では、その装置が多分世界最小標準で、くるみのような形をした小さな機械によって、使用者にチャージすることで行われるらしい。しかし前述のとおり、回数に使用制限があったことがミソ……。

## タイムリープは楽しいことばかり……？

タイムリープの能力を持つことを自覚し、その活用の仕方を一度覚えてしまうと、誰でもその楽しさを満喫しようとするのは当然……。これが軍事的、政治的、経済的に活用されれば大変だが、そこは女子高生のこと。真琴は、妹に先回りしてプリンを食べたり、学校での失敗を高瀬クン（松田洋治）に押しつけたり、自分の成績を急にアップさせたりとたわいのないこと（？）に、その能力を活用していた。さらにある日、千昭から全く予想もしなかった告白を受けて、狼狽した真琴はタイムリープしてその告白をなかったことにしてしまったが、すると今度は同級生の早川友梨（垣内彩未）が千昭に告白したり……。さらに頭がよくカッコいい功介についても、下級生から「先輩とはどんな関係ですか？」と問いつめられ、「ただの友人」と答えると、下級生の藤谷果穂（谷村美月）が功介に告白してくる始末……。

そりゃもともとみんな微妙な年頃なのだから、それをタイムリープで人為的に修正していると余計に話がややこしくなることは当然……。そんなこんな動きをしている間に、実は真琴の頭も大混乱。さらに失敗を押しつけられた高瀬クン

は、ある日突然牙を剥く始末……。タイムリープは楽しいことばかりではなく、使い方によっては大変な凶器になることに気づいた真琴は、次第に1人悩むことに……。

## 物語は意外な方向に……？

そもそも「タイムスリップ」ものには、大別して2つのパターンがある。その第1は『タイムライン』（03年）、『戦国自衛隊1549』（05年）、『幻遊伝』（06年）のように一度時空を超えて異なる時代にタイムスリップしてしまうと、その時代に入り込んでしまうもの。そして第2は『サマータイムマシン・ブルース』（05年）や『もしも昨日が選べたら』（06年）そして『時をかける少女』のように、何度も過去と未来を行き来するもの。

そして前者の場合は、ストーリーは比較的簡単で、ポイントは現在に戻れるかどうかになるのだが、後者の場合はストーリーがややこしく、よほど頭を整理しないとついていけないことになる……。

そのうえこの『時をかける少女』では、物語は後半意外な方向に進んでいく。それは千昭から真琴に、「お前タイムリープしただろう」と問いつめられたこと。「えっ、千昭はなぜそれを知っているの？」と驚く真琴だが、実は千昭こそ単なる転校生ではなく、未来から今の時代にタイムリープしてきた張本人。したがって、あのくるみのような形をした小さなタイムリープの道具の所有者も実は千昭。するとそこで問題は、タイムリープの残りの使用回数は、ということになるのだが……？ そんな物語の展開は、映画を観てのお楽しみに……。

## 高校生の言葉遣いに唖然……？

国語力の低下と言葉遣いの乱れは次第に深刻となり、このままでは物理的な「日本沈没」以前に国語や言葉を失うことによる「日本没落」が時間の問題……。そう考えている私だが、この映画で主人公の3人がしゃべっている言葉遣いを聞いてみると、その乱れに唖然。もっとも、多分これが、今ドキの高校生の標準的な言葉遣いであり、もっとレベルの低い学校や悪ガキグループたちの言葉遣いはさらにひどいものなのだろう。こんな言葉遣いに対して、親はもとより学校の先

生たちが何も注意しないのが当たり前という今の日本の教育状況は、まさに最悪……？

## どうしても追記の必要が……

本文を校正中の8月24日付産経新聞夕刊の「たけくまメモ出張版」で、『時をかける少女』口コミでヒット」という記事を読んだので、どうしてもひと言追記の必要が……。

『ゲド戦記』については、8月24日付読売新聞夕刊が「映画『ゲド戦記』原作者が苦言」と題して、原作者のアーシュラ・K. ル＝グウィンが「物語のつじつまが合わない」「登場人物の行動が伴わないため、生と死、世界の均衡といった原作のメッセージが説教くさく感じる」などと記したと報道したのをはじめ、さまざまな記事で次第にその酷評ぶりが目立ってきている。

上記産経新聞の記事も同じで、『ゲド戦記』には新人らしい熱意というものが、作品から全く感じられない」とのこと。この記事が面白いのは、「マスコミ宣伝」に対峙する「ネット言論」という構図を明確に設定し、「特に映画のような商品は『口コミ』がバカにできない側面がある」「そしてネットは、おそらく世界で初めて『口コミ』が原動力となっているメディアである」と指摘していること。そして、細田守監督の『時をかける少女』は、「ネット的にはやたらと評判がいい」というわけだ。

今や「ポスト小泉」は安倍晋三官房長官で99.9%決まりだが、『ポスト宮崎』ネットで育つ？」と見出しをつけている文脈から見れば、宮崎駿の後継者は宮崎吾郎ではなく、細田守だと予想しているのかも……？

2006（平成18）年8月25日記